

# 〈八月の言葉〉

Mランドニュース第716号より

## 〈半日村〉

「半日村」に二平という子が住んでいて、ある日、父母の話に耳にしました。半日村は前に高い山があつて、半分しか日が当たらない。「何という村かろう。あの山さえなかったら」と、毎晩愚痴を聞いて二平は育つた。

二平は次の朝、袋を担いで山に登つた。てっぺんに着くと、土を入れて下りてきた。その土を前の湖にザアッと空けた。二平は来る日も来る日も山に登つた。それを見ていた子供たちが三人四人とやる者が増えて、みんなで山の土を湖に空けはじめた。大人たちも手伝う人が出てきた。こうして何年も何年も経ち、ある日、半日村にパッと朝日が射して、花は笑い、稲が風にそよいで、みんなは前に飛び出して朝日を浴びた。山は半分になり、湖も半分になって田んぼも出来た。

それから「半日村」は「一日村」呼ばれるようになった。